

第五回福原徹演奏会

# 徹の笛

FUKUHARA TORU Recital vol.5

本日はお忙しい中ご来場いただき、誠にありがとうございます。

昨年から再開した「第二シーズン」の二年目、2001年の初回から数えて五回目のリサイタルを迎えることが出来ました。これも皆様方のご指導ご支援の賜物と、心より厚く御礼申し上げます。

以前、プログラムに記した「笛には未知の可能性があると信じています…新しい笛の音楽を作るためには、まず演奏家自身が作曲し、演奏しなければ」という考えや、「笛の魅力のアピールのみでなく、笛を通して音楽を見つめ直す事で邦楽の発展、さらには新しい音楽の創造に、ほんの僅かでも寄与できないだろうか」と夢見る気持ちは、今も全く変わっておりません。

しかし、それがとても困難であることを、前にも増して感じているのも事実です。道は険しく、先は見えず。

でも、そんなことは当然のこと。今さら怖気づいたところでどうしようもない、と思い直して、また試行錯誤を続けるのです。

お見苦しいこと、お聞き苦しいこともあるかと存じますが、今後変わらぬ御指導を賜りますよう、謹んでお願い申し上げます。

今回も、共演者の善養寺さん、中川さん、そしていつも支えて下さるスタッフの皆様はじめ、多くの方々のご尽力、ご協力をいただきましたこと、誠に有難く存じます。

最後になりましたが、本日も来場賜りました皆様へ、改めて御礼申し上げます。ありがとうございました。

福原 徹

## solo 02

生き生きと。

篠笛と能管の短い独奏曲。

数年前から始めた「duo」シリーズ、昨年から始めた「solo」シリーズ、どちらも題名を二桁に設定してある。

## 月光と海月

笛と尺八とピアノによるコラボレーション。

今回は詩歌を題材にと思い、数か月の間、本棚、書店、図書館を回ったり来たりして、ようやく五つの詩を選び出した。

その中でも、ひときわ惹かれたのがこの朔太郎の詩。

善養寺さん、中川さんとは、たびたびご一緒させていただいているが、三人で新しい作品に取り組むのは今回が初めてである。

月光と海月　萩原朔太郎
<p>月光の中を泳ぎいで  むらがるくらげを捉へんとす  手はからだをはなれてのびゆき  しきりに遠きにさしのべらる  もぐさにまつはり  月光の水にひたりて  わが身は玻璃のたぐひとなりはてしか  つめたくして透きとほるもの流れてやまざるに  たましひは凍えんとし  ふかみにしづみ  溺るごとくなりて祈りあぐ。</p>
<p>かしここにむらがり  さ青にふるへつつ  くらげは月光の中を泳ぎいづ。</p>

[福原 徹]

## duo 05

篠笛と尺八の二重奏小品。

笛と他の楽器による二重奏「duo」シリーズの5曲目。

笛と尺八は、どちらも竹製の管楽器だが、伝統の中では共演する機会が少ない。近いようで遠い。しかし、もっと一緒に音楽する機会があっても良いと思う。

## もみぢ葉

1744年（延享1）市村座「七種蛸管我」<sup>ななくさわかやきそが</sup>の三番目、長唄「高尾さんげ」（作曲・杵屋新右衛門、作詞不詳）の一節を独立させ「めりやす」としたもの。

第三回では地歌「ゆき」、前回は「黒髪」を吹いたが、今回は「もみぢ葉」。唄・三味線なしの笛だけで自由に演奏するので「補曲」としたが、特に変わったことをするわけではない。

私事になるが、この曲は笛を習い始めて最初のお濠い会で吹いた「初舞台」の曲である。稽古を始めてわずか半年。たまたま稽古の帰りに師匠やお弟子さんたちと喫茶店にいる時、「君は何を吹くの?」と誰かに聞かれ、「もし出るならこれがいい」と凶々しくも宣言してしまったのだ。音を出すだけで精一杯の、痩せた男子高校生が何故こんな曲を選んだのか? 国立劇場での本番は、目を瞑って必死に吹いた。上手く出来るはずもない。しかし、変声してからずっと舞台や人前で演奏するということから離れていた私が、やっと自分の居場所のようなものを見つけることができたのが、この時。

（歌詞）紅葉ばの　青葉 <small>なつこだち</small> に茂る夏木立　春は昔になりけらし
<p>世渡る中の品々に　我は親同胞<small>おやはらから</small>の為に沈みし恋の淵  浮みもやらぬ流れのうき身　憂いぞつらいぞ勤めの習い  煙草<small>きせる</small>のんでも烟管より　咽喉<small>うすけむ</small>が通らぬ薄烟り  泣いて明さぬ夜半とてもなし　人の眺めとなる身はほんに  辛苦<small>もんび</small>萬苦<small>おぐるま</small>の苦の世界　四季の紋日は小車や</p>

PROGRAM

福原徹 作曲	duo 05　【初演】
<ul style="list-style-type: none"><li>●篠笛———福原 徹</li> <li>●尺八———善養寺恵介</li></ul>	
初世杵屋新右衛門 作曲 福原徹 補曲	長唄めりやす　もみぢ葉
<ul style="list-style-type: none"><li>●篠笛———福原 徹</li></ul>	
福原徹 作曲	solo 02　【初演】
<p>走る  飛ぶ</p>	
<ul style="list-style-type: none"><li>●篠笛・能管——福原 徹</li></ul>	
—————休憩—————	
福原徹 作曲	月光と海月　【初演】
<ul style="list-style-type: none"><li>I</li> <li>II</li> <li>III</li></ul>	
<ul style="list-style-type: none"><li>●篠笛・能管——福原 徹</li> <li>●尺八———善養寺恵介</li> <li>●ピアノ———中川俊郎</li></ul>	



写真 大窪道治

## 福原 徹 (ふくはら・とおる / 邦楽囃子笛方)

1961年東京生まれ。六世福原百之助(のちの四世宗家寶山左衛門・人間国宝)に入門、福原徹の名を許される。東京藝術大学音楽学部邦楽科卒業。邦楽囃子笛方として、長唄・箏曲などの演奏会、日本舞踊、歌舞伎の舞台、放送、海外公演等で古典演奏活動を続けると共に、笛を中心とした作曲に取り組む。

2001年第1回演奏会「徹の笛」(津田ホール)を開催、平成13年度文化庁芸術祭大賞(音楽部門)を受賞。

2002年～2003年、新作連続演奏会「徹の笛 in MUSICASA」を隔月で連続6回開催。2004年第2回「徹の笛」、2006年第3回「徹の笛」(紀尾井ホール)を開催。

昨年よりリサイタルシリーズを再開、2012年第4回「徹の笛」(王子ホール)を開催。

今年で第19回を迎えた洗足池の野外コンサート「春宵の響」では、初回から企画構成にも携わっている。

東京藝術大学、有明教育芸術短期大学、清泉女子大学等の非常勤講師を歴任。NHK文化センター(青山、浜松、名古屋、柏)講師。また、東京、浜松、彦根などで指導にあたり「百笛会」を主宰。長唄協会会員、創邦21同人、NPO法人大田まちづくり芸術支援協会アドバイザー。著書：「やさしく学べる笛教本」(2003年)。

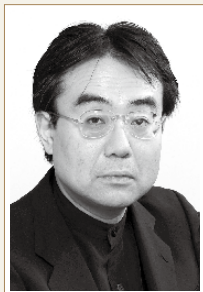
C D：1997年作品集「徹」、2007年コンサートライブ盤「徹の笛」、2009年二枚組の作品集「lift off」を発表。



## 善養寺 恵介 (ぜんようじ・けいすけ / 琴古流尺八演奏家)

東京藝術大学邦楽科卒業、同大学院修士課程修了。6歳より、虚無僧尺八の手ほどきをうける。同大学在学中は山口五郎師(人間国宝)に師事。1999年、第一回リサイタルを開催以来、現在に至るまで10回を重ね、2008年のリサイタルでは文化庁芸術祭新人賞、2009年では優秀賞を受賞。2000年2月、尺八教則本「はじめての尺八」(音楽之友社刊)を執筆。2002年5月、日本伝統文化振興財団奨励賞受賞。同年10月、世界銀行主催、世界宗教者国際会議(於 イギリス カンタベリー大聖堂)にて、招待演奏。関東各地にて尺八普及のための尺八教授活動を行っている。

公式web site <http://zenyoji.jp/>



## 中川 俊郎 (なかがわ・としお / 作曲家・ピアニスト)

桐朋学園大学作曲科卒業。作曲を三善晃、ピアノを末光勝世、森安耀子に師事。武満徹主宰「Music Today82」10周年記念国際作曲コンクール第1位。09年サントリー芸術財団主催による全曲オーケストラ作品による個展開催、この成果に対して第28回「中島健蔵音楽賞」受賞。11年同財団による個展「トランスミュージック」開催。他に村松賞、CMの「ACC賞」等多数。日本現代音楽協会副会長、日本作曲家協議会理事、作曲家団体「深新會」副代表。双子座三重奏団メンバー。他のコラボレーションの相手には、歌手・作曲家の木村弓、演出家の小池博史などがある。

2013年11月20日(水) 7時開演 銀座 王子ホール

- 後援：公益財団法人 日本伝統文化振興財団 / (有) 邦楽ジャーナル / 邦楽の友社
- 制作：日本伝統音楽振興会 黒河内 茂 ●舞台監督：清野正嗣 ●協力：加藤繁治 ●デザイン：長田 彰
- 主催：福原 徹

次回のご案内

## 徹の笛 第六回福原徹演奏会

平成26年(2014年)11月28日(金) 銀座 王子ホール